

『歴世尚葉略伝』等にもでており、明治以後は日本女科史、日本医学史以下殆んどの日本医学通史に記述されている。

守定は二条家々司（一三〇〇年頃）であり、御所の西にあった御池の畔に住んでいたが、竜神より助産の法、神仙散の秘方を授かったという伝説に包まれている。二代將軍足利義詮の室紀良子の出産に際し功が有つて尚葉にあげられた。その時出生した若君が三代將軍義満となつた。それ以後、安芸家は宮中、足利家の産事に侍することとなつた。いま北小路家に伝わる御産所日記三巻には、永享元年（一四二九）より永録三年（一五六〇）までの一三〇年間にわたる足利將軍家の産事が記してある。『群書類従』に採録されているが、日本史専門家の研究（満田栄子、御産所日記の一考察、史窓二七号、昭四十四・今谷明、北小路家の文書について、史林、六十巻二号、昭五十一）も既に数々なされている。

また同家十代貞俊の代（桃山時代）に描かれたとされる安芸守定像がある。これは日本女科史や日本医学史に載せてある守定像の原画である。守屋正著「安芸守定像について」（医学選粹、七号、昭五十二）に詳しく解説してある。また『京都の医学史』産科篇において、私も多く引用させていたが、

さらに北小路家六六〇年の歴史の中でいまひとつ特筆すべき事がある。日本の三大飢饉の一つといわれる天保飢饉の際、京洛の街にも難民、死者が溢れた。この時北小路家十六代竹窓（三郎）は大学助であり儒者として高名で、三条東洞院で教諭所を開いていたが、その惨状を見るにしのびず、天保八年、

町奉行所与力や鳩居堂主人熊谷直恭らと協力して、三条河原に救小屋を作つて十五カ月間にわたつて、多くの難民・病人に食糧、医薬品を与えた。その状況は一一図に描かれて荒歳流民救恤図一卷として残されている。大塩平八郎の乱とほぼ同一時期に行われた福祉事業である。

著者は所蔵する『御産所日記』の原巻と『群書類従』本とを比較した結果、六カ所の異同をみつけたという。同家の史料についてはまだ未研究の部分も多い。また医学史のみならず、政治史、文化史に関連する個所もある。

著者の真摯な人間性のあふれた好著であり、これらも含めて著書が自家の家史について内側から見つめていることは、医学史研究にとつて甚だ興味深いものがある。

（杉立 義一）

〔かもがわ出版、京都市中京区衣棚通夷川上ル吉田ビル、電話〇七五―二二―一三五八七、一九九二、判、一九九頁 一、三〇〇円〕

小関恒雄・北村智明訳編

『クニツピングの明治日本回想記』

本書は明治期の御雇外国人教師であったドイツ人、エルヴィン・クニツピング（Erwin Krippin、一八四四―一九二二）の『回想記』の訳編書で、クニツピングの曾孫トーマス・フィールハーバー氏の元に残るクニツピング自身が子孫のために書き残

した、いわゆる「自分史」の訳書である。訳編者は『明治初期御雇医師夫妻の生活―シュルツェ夫人の手紙から』の訳者であり、また学会誌等においても精力的に御雇外国人教師に関する報告を続けている小関恒雄・北村智明両氏である。クニツピングの経歴についての詳細は、本書を読まれば一目瞭然であるが簡単に触れておくと、彼は一八四四年四月二十七日にオランダ国境に近い、ドイツ（当時のプロイセン王国）のクレーヴェに生れた。一八六四年に航海士となり、一八六七年クーリア号に乗込み各国を回った後、一八七一年（明治四年）年、日本に到着したが、クーリア号が日本に売却されたためワグネルの斡旋で大学南校のドイツ語教師となった。以後、一八九一（同二十四）年に帰国するまで、大学南校、内務省などの御雇外国人教師として、二十年間にわたり日本に滞在したが、特に中央気象台においての活動は有名である。本書では日本での生活を中心に、生いたちから晩年までが六章にまとめられ、その後に資料編が付けられている。この資料編及び本文中の補足解説と訳注は、クニツピングにとどまらず御雇外国人教師についての、非常に詳細で豊富な情報を提供している。訳者もまえがきにおいて記しているが、クニツピングの言うことがすべて正しいとは言えないけれども、一外国人の見た日本について―日本人そのもの、事件、政治経済、学校教育や文化など―の感想と意見、また外国人教師の仲間たち各々の人間的側面や生活態度など、日本側の公的な史料等から読み取ることのできない点が率直に記されている。

クニツピングが医学教師ではないため、本書の内容は医史学の立場から見ると多少、視点が異なり物足りない印象が残ることは事実である。しかし、彼の広い交際範囲からの医学を含めた外国人教師の仲間たちについての記述は、非常に興味深いものを含んでいる。特に最初のドイツ人医学教師ミュレルは、クニツピング一家の家庭医であったことから記事が多い。例えば、ミュレルとホフマンの性格が全く違っていたということ、具体的な例をあげて説明している。それは、個人的に兩名と交際のあった彼だからその記述であり、公文書からは伺い知ることのできないものである。

訳者はクニツピングの日本滞在に関する記述について、大変な注意を払って日本側の文書などとの比較検討を行い、矛盾のある部分や本文の裏付けとなる部分については、細かく補足解説や訳注をしている。また資料編の「クニツピング関係文書抄」には『公文録』『太政類典』を中心に集めた、クニツピングに関する公文書が数多く収められており、一人の外国人教師に対する雇用・生活条件等の変化を知るのに役立つ。この資料は、御雇外国人教師に興味を持たれる方にとっては一読の価値があるものと思う。このように訳編者の大変な努力のおかげで内容が豊富になっているが、残念に感じたのは資料編にクニツピングの個人史や関連事項を年表式にまとめられていれば、歴史的関連のもとで理解するのに役立ち、よりクニツピングが生きた時代の変化が明確になるように思った。

これまで、いくつかの御雇外国人教師自身の手による日本滞在記の存在が知られ、すでに出版をされている。しかし、子孫のために書き残した「自分史」は存在自体の確認も難しく、また存在が知られていたとしても閲覧から、翻訳・出版に至るまでには各家庭のプライバシーの問題もあり、なかなか許可の得られない場合が多いであろう。このような点でも、貴重な意味を持つ翻訳・出版と言えよう。御雇外国人教師について関心のない方にとっても、明治期日本の歴史の断片を外国人が書いたものとして、本書の内容は興味あるものと思う。

(高安 伸子)

(文同社、東京都中央区銀座八一―一五四、電話〇三―三五四五
—一六六一、一九九一年、B六判、三二五頁、二、五〇〇円)

北里研究所附属東洋医学総合研究所刊 医史学文献研究室編

『小品方・黄帝内経明堂 古鈔本残巻』

書物を愛するものにとつて、その書物が貴重なほど楽しみが深い気がするの私だけであろうか。尊経閣文庫に、世にも希なる書物ばかりを集めた前田公という人は、たぶん書狼の類だったのだろう。

このたび、その尊経閣蔵の『小品方』と『黄帝内経明堂』の貴重書が、北里研究所附属東洋医学総合研究所の二十周年記念として、医史学研究室によって出版されたことは慶事で

ある。地上に一点しかない貴重書を出版することに同意された尊経閣文庫の英断と、出版に至るまでの編者の努力とは賞賛に値する。

この書物は以下のような内容で成り立っている。

凡例

『小品方』巻一原色影印

『黄帝内経明堂』巻一原色影印

『小品方』巻一翻字

『黄帝内経明堂』巻一翻字

『小品方』書誌研究

『黄帝内経明堂』書誌研究

あとがき

『小品方』『黄帝内経明堂』とも原色写真版で影印されており、それぞれが非常に鮮明ですばらしいものである。特に朱点までくつきりと写っており、本になるまでのなみならぬ苦労が感じられる。さらに翻字と注釈の周到な配慮も行き届いている。桜井氏評の嘆きもうべなるかなと思われる。

『小品方』が中国で佚亡してから一千年余をへて出現した経過は、小曾戸洋氏の「『小品方』書誌研究」に詳しい。この『小品方』巻一の伝来とその文献学的研究はこの書誌研究で精致に論じられ、今日最高の水準である。

その『小品方』は、序文で述べるようにこの書が繁雑になりすぎた当時の処方集をまとめる意味合いをもち、さらに患者の体力の強弱や年齢性差を論じ、疾病の地方性を重視して、